



えと文

川島 紘一

私のラムプ

たしかに、こんな風景をみたような気がする。砂浜か、砂丘か、いや、はてしない砂漠か、そこに古いラムプが置かれていた。

この白黒の写真ではよくわかりませんが、このバックにはカドニウム、レッドの夕焼けの空がある。そして、その錆びたラムプには、誰がともしたのか、細々と火が燃えていた。

やがて、夕焼けは燃えつき、荒涼とした砂丘に暗闇が訪れるだろう。空には、鋭い三日月がかかっていた。まるで満たされない青春の象徴のように。やがては、月も傾き、まっ暗闇の中に、ラムプは孤独に、ひそやかに、ゆらゆらと燃えつづけるだろう。いや、燃やしつづければならない。その時、ラムプは、はてしないロマンの夢をみるだろう。

たしかに、私は、まるで幻のような、こんな風景をみたのでした。

(女子中高教諭、英語科)